

# 野沢 しの武(のさわ・しのぶ)

## 1、プロフィール

俳人。本名忍。医師。豊山千蔭に師事。仕事の傍ら自宅に「しの武居句会」を開き、後進の育成に努める。紺綬褒章受章。「風土」同人。俳人協会会員。

<生没>

1928(昭和3)年1月1日 ~ 2017(平成29)年9月29日

<代表作>

第一句文集『日々』(昭和60)。第二句集『櫻』(平成11)。第三句文集『淡交』(平成20)。第四句集『老樹』(平成26)。

<青森との関わり>

八戸市出身。八戸赤十字病院にて伊藤麦子の手ほどきを受ける。八戸市文化賞受賞。八戸市文化功労者表彰。

## 2、作家解説

昭和25(1950)年、八戸赤十字病院にインターンとして赴いた時に、副院長であった伊藤麦子(ばくし)に俳句の手ほどきを受ける。その後弘前大学医局在局中に、「連峰」の佐藤流葉に師事。37年、八戸市に青森労災病院が出来た時に、皮膚泌尿器科部長として赴任し、そこで豊山千蔭という生涯の師に出会う。42年、市内に開業。その年より自宅で「しの武居句会」を始め(後に会場を長者公民館に変更)て現在に至り、年4回発行の機関誌「櫻」は121号を数える。医者仲間での「どくた句会」も47年より主宰。60年に第一句文集『日々』を出版。「序に代えて」の中で豊山千蔭は、集中の一句「勝鶏の嘴が噛みゐし羽毛かな」を挙げ、「羽毛を捉えたことにより、勝鶏の影に隠された負鶏の哀れさが想起される。この把握の深さもしの武俳句の特徴」と評している。また、句文集ということで、確かな筆力で書かれた奥行き深い9編の文章が合わせて載せられている。62年神蔵器主宰の「風土」に入会、平成2(1990)年「風土新人賞」、6年「風土賞」、10年には作品

30 句により「桂郎賞」を受賞。分かる俳句、目に見える俳句を説き、文法にも精通し、句作する姿勢は厳しい。そのようにして作られた句作品は骨太かつ繊細で味わい深く、東奥日報社主催の「青森県俳句大会」でも3度優勝するなど、各俳句大会での活躍は枚挙にいとまがない。第2句集『櫂』の中の〈亡き父の話におよぶ蜆売〉は、蜆売との気軽なやりとりが想像され、底流には父を偲ぶ心が窺える。櫂はしの武の好きな樹だった。そして第3句文集『淡交』よりの句、〈友には叙位われには風の狗尾草〉は、叙勲の友と我が身を比べた哀感が、季語の狗尾草(ねこじゃらし)の持つ素朴さにより純化され、身の内に俳句という大きな芯をもつ強さが思われて見事である。平成 26 年に第4句集『老樹』を東奥文芸叢書として刊行。平成 29 年9月 29 日に満 89 歳で逝去した。